

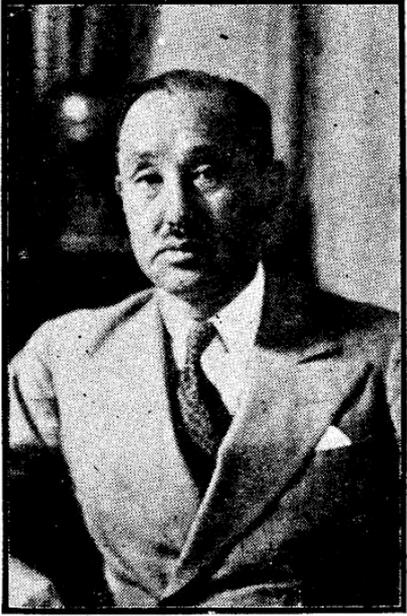


號四十二第
昭和十四年八月十八日發行
行發日五・回一月每
錢五金部一價定誌本
錢拾六金(共稅)年一
助之幸川大 編發行發
一ノ七西座銀區橋京市京東
社信通盟同 所行發

# 噫、故岩永社長

社団法人同盟通信社 役員・職員代表 古野伊之助

岩永社長
去る二日朝、歐洲の情勢は愈々急を告げ、戦争か平和か、風雲たぎらぬうちに、我同盟の全機構は、擧げて一刻ときぎみ行く世界の動きを日本全土に傳ふべき、本来の任務に集中せられつゝあるの時、突如として報あり、我等の社長、輕井澤に急逝すと。



岩永社長
願れば社長の生涯は、眞に報道報國に捧げられた實き一生であつた。我國民のために耳となり、口となつて、日本を全世界に語り世界を全日本に傳ふべき國家的使命これこそ社長が身を心をも捧げ盡された生涯の事業であつた。社長が國際通信社に入つて、始めてこの業に就かれたのは大正八

年のものであつた。當時世界の報道界に於ける我日本の地位は、遺憾ながら外國の一屬領に過ぎなかつた。我國の眞意と實相とを世界に語るものは、日本の通信社には非ずして、日本に於ける外國の通信網であつた。世界の動向を日本の國際的水準を高むるに、献身の努力、強大なる外國通信社の勢力に對立して、一城を築き、一角を整へつゝ、自らは求むるに利もなく、名もなく、一意、初志に猛進せられた。此間國際通信社より新聞聯合社へ、次で今日の同盟通信社へと、常に先づ己を捨て、内に實力を養ひつゝ、新たな構想への工夫と發展を重ね、國家公共の通信機關確立のため、辛酸苦節の實に二十有餘年、遂に極東の天地より、外國通信社のあらゆる勢力を一掃し、我國通信事業の自主權を確立、報道戦線に於ける東亞の指導的立場を確保するに至つたのである。

若しそれ、今次事變に臨んで、日本が世界最大の一に數ふべき我が同盟通信社を保有し國際報道の戰場に斷然たる優位を勝ち得たる所以のものを思へば、岩永社長の功績の、輝く國威と共に永遠にして不滅たるを、我等は殆りを以て確信するのである。

社長は又、明朗なる人格と高邁なる識見とを以て廣く全世界に知られ、國民外交人としても眞に偉大な足跡を残された。また、社長として我等に臨まるゝや、常に國家代表通信社の使命の重きを説き、我等に求むるに正確にして公正なる報道と大同結盟の高き精神とを以てし、且つ身を以て強く正しく明るくその範を示された。我等はこの偉大なる社長を慈父と仰ぎ、未だかつて、何等の遲疑するものなく、樂しく爽やかに、渾身の努力をこの任務にうち込むことが出来た。

總務回狀第四十五號 昭和十四年九月二日
謹んで御知らせ致します。
私共役員及職員一同の敬慕の的でありました岩永社長は九月二日午前九時十七分輕井澤の別邸に於て狭心症のため急逝致されました。寔に悲しみの至りに堪へません。茲に全職員と共に心からなる哀悼の意を表します。
葬儀は九月七日午後一時より二時青山斎場に於て神式により社葬を以て取行ふことに決定致しました。
社葬次第は左の通りであります。

病狀經過
主治醫 田中省三
同 五斗 欽吾
一、八月卅一日 午前八時十分東京發輕井澤に向ふ。胸部に若干の疼痛あり一沫の不安あるらし、上野驛迄、田中醫師の同行を求めたり。車中、近衛公と向車機嫌よく會談、十一時半輕井澤着、午後三時頃心臓部の疼痛を訴ふ。五斗醫師の來診を求めたるが、やがて疼痛去り平靜に歸したり。五斗醫師は心臓部に特別な異常を認めざるも脈搏は微少なり。數日前より風邪氣味にて左背下部にラツセルを聞同九時田中醫師來着、同夜異狀なし。

あゝ、われ等の慈父!!

# 岩永社長逝去

## 七日、青山齋場にて社葬

### 岩永社長

## 卒去

### 岩永社長

は最近甚だしく疲勞の色あり八月三十一日朝輕井澤の別荘に赴き静養中であつたが、出發當時背部に疼痛を覺えて以來別項の田中、五斗兩醫師の經過發表通り症狀に一進一退あり、急行せる田中主治醫の周到なる看護を受けつゝあつたところ、九月二日午前六時半頃から狭心症の發作を起し田中主治醫及び五斗博士の懸命の手當も及ばず、夫人や令嬢達に看護られたる同九時十七分心臟麻痺のため遂に溘焉として逝去された。享年五十七。同盟通信社として世界の通信社

の地位に高め國際報道機關としての地歩を確保せる偉大なる功績は我が通信界發達史の



りて、この巨材は哀愁慟哭の聲を浴びつゝ終に不歸の客となつたのである。病革まるや、輕井澤山莊に在りし近衛公、前田利爲侯、鳩山一郎、伊澤多喜男、内田信也の諸

氏を始め昵懇の十數氏の來訪あり懇ろなる弔意を表した。一方訃報に接した本社では憂愁一色に包まれ、肅然たる裡に社員一同は心からなる哀悼の意を捧げ社長生前の温容と聲咳とを偲んで痛惜措くところを知らぬものがあつた。古野常務理事は直ちに輕井澤に急行し、遺骸は同日午後八時靈柩車で輕井澤別荘を出發、鈴子夫人、令嬢、近親者、佐藤尚武氏、古野常務理事其他に護られ、三日午前零時半親戚知友、同盟各局部長等の出迎へを受け品川區上大崎の自邸に哀しくも淋しき歸宅をなした。

## 移靈祭

かくて遺骸は表應接室に設けられたる祭壇に安置せられたが、嗣子信吉氏は中南支總局勤務として恰も從軍中であつたので其の歸京を俟ち三日午後七時半より嚴かな

移靈祭が執行され、今は早長の前額に額つきて限りなき瞻慕に、泣笑また新たななるを覺ゆるのみであつた。超えて六日には、畏き邊りより叙勳並に祭資御下賜の御沙汰あり、故人が我國通信界に盡したる功を思召されたる。聖恩に遺族を始め近親者、社員一同は



感泣したのである。故人の遺志により一切の香華供物を辭退したのであつたが、それにも拘らず二百餘基の生花、花環が贈られ、屋内庭内は素より路上にまで三重三重に立てられ、また弔問者も朝野の名士を始め總ゆる階級を通じて無慮二千餘名の多きに達し、邸内は嚴肅なるうちに可成りの混雑を呈した。

## 葬送

### 同盟社前の

故岩永社長の同盟社葬は、殘暑きびしき九月七日青山齋場に於て神式により極めて嚴肅に執行された。齋場に於ける各係員は早曉より之れが準備に當り、各方面から寄贈された

花環花籠は齋場の正門から場内を所せまきまで埋め盡し稀有の盛觀を呈した。當日午前十一時十分、靈柩は上大崎の自邸を出發、遺族親戚友人及び同盟社幹部等は二十數臺の自動車に分乘して之に隨つた。かくて蜿蜒たる葬列は一路銀座西七丁目なる同盟本社へと向つたのである

### 奉奠供饌

### 社葬

の式次を進める。この頃から齋場には近衛公を始め朝野の名士、新聞社側代表等陸續として参列して既に立錐の餘地なく、遂には本社側幹部並に各委員は参列者のために席を譲つて場外に退くといふ始末で、参列者の顔觸れと云ひ其の數と云ひ近來稀有の盛儀であるとは齋場事務員及び警戒の青山署員の賞嘆であつた。充つ山口大教正は祭主に代つて祭文を奏すれば、どこからとなく嗚咽が洩れる。次いで阿部總理大臣(代理)、同盟通信社理事會代表田中都吉氏其他の弔辭が朗讀され、

として佐藤尚武氏が、別項所載の如く「此嚴肅盛大な葬儀に臨んで、角ばつた弔辭を讀む氣にはな

### 玉串奉奠

### 古野理事

最後に田中委員長禮拜して参列者一同に謝辭を述べ、順次禮拜して午後一時五十分式終了、午後二時より一般告別式に移つた。この時既に齋場前には一千餘名を數ふる参會者は整然肅然と堵列して待つといふ有様で、踵を接して禮拜する名士は午後三時まで實に二千數百餘名に達し、道かに故社長の遺業が如何に大きく其の交友が如何に廣かつたかを物語りて剩さぬものがあつた。午後四時代々幡火葬場に於て茶毘に附し、翌八日午前十一時多磨墓地に於て墓前祭を執行し、故社長の英靈は斯くて永しに神鎮まりましたのである。

### 友人代表

### 厳肅なる社葬

が、社前には早くも全社員並に電通全社員が堵列して靈柩車を待つた。時に十一時三十分、警視廳の白オートバイを先頭にした葬列は數寄屋橋方面より進行し來り

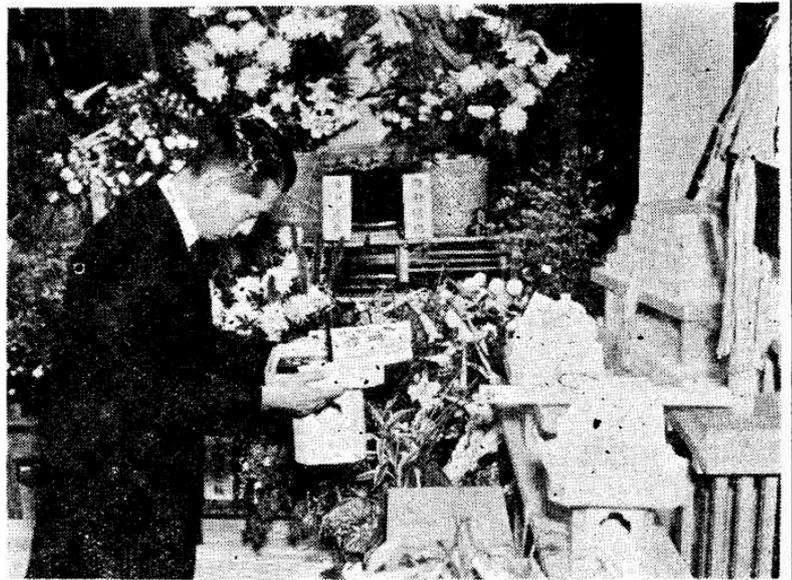
車した。このとき經濟部長の「氣ヲ付ケ」の號令一下、全員肅然として襟を正し「敬禮」の號令と共に永別の禮を捧げて、葬列は再び進行を始め齋場へと向つた。

### 社前に停

### 友人代表

が、社前には早くも全社員並に電通全社員が堵列して靈柩車を待つた。時に十一時三十分、警視廳の白オートバイを先頭にした葬列は數寄屋橋方面より進行し來り

眠る故社長に惜別の辭を捧げ「社長！我等は堅く誓ふ、此の悲しみを越え、不敏に鞭つて社長の遺志を繼ぎ、必死の氣と魂を社業に捧げつゝ以て社長の英靈に答へんことを」と聲を勵ませば並居る参列者も自づと襟を正した。爾餘の弔文及び千數百に上る弔電は、朗讀を省いて恭々しく靈前に捧げられ、次で喪主、遺族、親族の順で靈前に



氏吉信子嗣るへ供に前靈を記勲に並章勲

# 故岩永社長の餘榮

## 叙勲と共に祭資御下賜

曩き邊りでは社団法人同盟通信社々長岩永裕吉氏の死去に對し、多年民間に在りて通信報道の事業に携はり、幾多國策に協力し我が國際通信權の確立に身を效すと同時に民間外交人として國家に寄與貢獻したる顯著なるの功績を嘉せられ、同盟社葬執行の前日たる六日、特に左の如く叙勲の御沙汰あり、逡信省宮本無電課長は同日午後四時勲章並に勲記を捧持して岩永家に至り嗣子信吉氏に傳達、之を靈前に供へた。

從五位 岩永 裕吉  
叙勲三等 授瑞寶章

尙、曩き邊りでは同盟通信社々長貴族院議員岩永裕吉氏が生前わが國通信界に盡せる功勞を嘉せられ葬儀に先立ち六日破格の思召を以て祭資御下賜の御沙汰あらせられたので古野常務理事は遺族代理として同日午後四時宮内省に出頭松平宮相より拜受し直ちに岩永家に至り靈前に供へた。遺族並に近親者は重ねての恩典に感泣した。

緒役となる。

一、大正九年四月 自ら岩永事務所を開き雜誌「世界の批判」を發刊して、世界の眼に映じたる日本を紹介、兼ねて新聞通信外交等の分野に於ける世界重要事象紹介に努む。

一、大正十年十一月 ワシントン會議に際し、國際通信社代表として渡米民間に在りて奔走す。

一、大正十二年十一月 國際通信社專務取締役に就任し、同社經營の實權を米人總支配人の手より回收、同時に英國ロイテル通信社と新契約の締結に成功し、通信事業の完全なる自主權を確保す。

一、大正十四年七月ロスタ(現在

のタス)通信社と交渉の爲めモスクワに赴き、最初の契約締結に成功次いで獨逸英米各國の通信事業を具さに觀察し、斯界一流の人物と親交を結ぶ。

一、大正十五年五月 國際通信社と東方通信社の合併成り、全國新聞社の共同機關として新聞聯合社を設立。その専務理事となる。

一、昭和二年五月渡米、A Pと新契約を締結す。

### 弔詞

貴族院議長  
伯爵 松平賴壽

貴族院へ議員國際觀光委員會員從五位岩永裕吉君ノ長逝ヲ追悼シ恭シク弔辭ヲ呈ス

## 故岩永前社長に

# 感謝決議文

## 満場一致で可決

岩永前社長に對する感謝決議文に弔慰金贈呈の件は別項九日の同盟理事會上議されたが、動議により理事長一任に決定、左の感謝決議案が満場一致で可決された。

### 決議

社団法人同盟通信社初代社長故岩永裕吉君は夙に卓抜なる識見を以て新聞通信事業の國家的並に國際的重大性に著目し、同盟通信社の成立並にその健全なる發達に對して不朽の貢獻を爲したり。

殊に同盟通信社をして、内は全

## 故岩永社長略歴

國新聞社及び放送協會の公益共同機關として我が國言論報道界に獨立不羈の地歩を保たしめ、外は世界第一流の通信社として國策遂行上の大機關たるに至らしめたるは、君の功績に歸すべきところ甚だ大なり。

茲に理事會は全員一致を以て故岩永裕吉君の逝去を痛悼すると共に其生前の盡力と功績とに對し深甚且つ眞摯なる感謝の意を表す。

昭和十四年九月九日  
社団法人 同盟通信社理事會



本社前に於ける全社員の禮拜

一、昭和五年一月 ロンドン海軍會議に渡英、歐米新聞界の首腦部と接衝する傍ら、マクドナルド英首相その他と私的に聯絡し、我が代表部を側面より援助し多大の貢獻を爲す。

一、昭和八年八月 加奈陀パンフに開かれた太平洋會議に出席し各國代表者を啓發するところ大なり。

一、同年ロンドン及びニューヨークに於て「イテル及びA P」主宰者と折衝、新契約の締結に成功し、東洋に於ける代表的通信社としての立場を確保す。またロイテルとA Pの間に居中調停の勞を執り、兩社の感謝を受く。

一、昭和十一年一月 全國の新聞社及び放送協會の公益共同機關として社団法人同盟通信社の成立せるはその賦身奔走に俟つところ甚大にして、成立と共に専務理事となる。

一、同年九月 同盟通信社初代社長に就任す。

一、昭和十三年十二月 貴族院議員に勲選せらる。

一、昭和十四年九月二日 輕井澤に於て急逝せらる。

# 弔辭

## 内閣總理大臣 阿部 信行

恭しく同盟通信社長貴族院議員岩永裕吉君の靈に告ぐ。

君は夙に報道事業の國策的重要性を強調し、其の卓抜なる識見と高雅なる人格を以て、通信報國の事業に其の半世を献けたるが、昭和十一年同盟通信社の成立を見るや推されて社長に就任し、名實兼ね備はれる世界的大通信社を實現して其の宿志を遂げ、内には輿論

を利導し、外には帝國の眞面目を世界に弘布す。蓋し其の功績は絶大と謂ふべし。  
今や國際情勢は複雑を極め、報道通信の任務は愈々重きを加へつつあるの秋、突如として君が訃を聞く。國家の損失莫に甚大なり。茲に葬送の儀に際し、謹んで敬弔の意を表す。希くは君が在天の靈來り享けよ。

## 同盟通信社 理事會長 田中 都吉

同盟通信社長岩永裕吉君、病を得て忽焉として逝く。眞に痛惜の至りに堪へず。

君は我新聞通信事業の先覺者たり育成者たり、更に殆んど完成者たらんとせり。その人格手腕内外の敬慕措かざる處なり。君の如き同盟通信社長は恐らく今後容易

に得られざるべきのみならず、所謂國民外交の實踐者としての君を喪ひたる缺陷は容易に償ひ難かるべし。君と多年提携協力、斯業の發達に微力を致したる我等同人は君を追憶するの念特に切なるものあり、茲に恭しく弔意を表す。君の靈希くは來り享けよ。

## 日本新聞協會々長 伯爵 清浦 奎吾

社團法人同盟通信社長貴族院議員岩永裕吉君忽然として逝く、洵に驚愕に堪へず。君始め國際通信社を起し更に新聞聯合社を組織し後同盟通信社の成るやその初代社長たり。幾もなくして日支事變の勃發するあり、君は大に努力して社命の達成に竭し昨年言論界に

致せる功によつて貴族院議員に勅選せられ、多難複雑なる國際情勢に對應して君の努力に俟つところ多かりしに今此計を聴く。獨り君のためのみならず國家のため喪ふところ實に大なるを悲しまずんばあらず。君我日本新聞協會に相談役たり、多忙なる社務を割きて之

が發展に貢獻せる事多かりしは予の君に對して感謝措く能はざるところなり。此に弔辭を呈して君の急逝に對し衷心哀悼の意を表す冀くは享けよ。

## 滿洲國通信社長 森田 久

時維昭和十四年九月七日、社團法人同盟通信社長岩永裕吉君の英靈を弔ふの日に會す。哀悼痛惜窮まり罔し。噫、悲しいかな。氏は夙に世界宣傳報道機關の重要堅陣を確保し、爾來帝國の國策遂行の一外廓として其の重きに任じ、高邁なる識見と溫雅厚厚なる人格とは廣く國際人として知られ、内外の景仰措かざるものありたり。

殊に曩に滿洲事變の處理に際しては東亞に於ける日滿兩國の一體不可分なるを強調せられ滿洲國通信社の創立に當りて、總ゆる厚誼と協力をとせられ滿洲國國策通信社が今日の地位を贏ち得るに至らしめしもの、實に父子の如く信らざるはなし。情は父子の如く信は兄弟の如く、滿洲國通信社の發展向上に寄與せられたる友誼は吾らの感激絶えざる所なり。  
吁、吾らの畏敬限りなき岩永氏今や亡し。概に頼きて悲しみ湧き殯に禮拜して泣哭止まず。  
時恰も歐洲の天地に妖雲叢起し世界の報道戦は武力戦と共に著しく股賑を極むるの秋、氏の卒去は誠に報道報國陣の一大損失と云はざるべからず。茲に吾らの蒙りし多年の眷顧を堅持し、敢てその御遺志に違はざらんことを誓ふ。  
冀くは在天の英靈來り享けよ。

# 弔問者

弔問者並に告別式參會者は三千二百餘名の多きに達し、一々尊名を記して謝意を表すべきではあるが本紙面が限である上、尊名を洩れなごある場合は却つて申譯のない次第で、因つて紙面の許す限りの尊名を記載したる點謹んで各位の御諒解を願ふところである。

(敬稱省略・順序不同)

- 近衛文麿、松平恒雄、徳川家正、木戸幸一、倉知鐵吉、阿部信行、前田利爲、小林一三、後藤文夫、三谷隆信、溝口直亮、水野謙太郎、風見章、榊山資英、賀屋興宣、美土路昌一、河原田稼吉、南大曹、光永星郎、河相達夫、金子堅太郎、原田熊雄、平川清風、ブランコ・ゲケリツチ、古河虎之助、藤田平太郎、藤井啓之助、堀切善次郎、細川護立、堀田正昭、徳川家達、徳富猪一郎、津島壽一、瀧正雄、伊達源一郎、田澤義輔、高石眞五郎、田川大吉郎、岩波茂雄、櫻内幸雄、穂積重遠、永井柳太郎、田村謙治郎、金子直吉、野田俊作、大藏公望、青木得三、横溝光輝、伍堂車雄、森藤昶、一力次郎、蠟山政道、野村駿吉、嶋中雄作、上野男一、小森七郎、兒玉謙次、青木一男、山室宗文、田中館愛橘、中川健蔵、永田秀次郎、正力松太郎、島田勝之助、末弘嚴太郎、鍋島正泰、榊山愛輔、青木周三、井上匡四郎、大久保利賢、小川郷太郎、松方幸次郎、阿部眞之助、有田八郎、松岡洋右、武者小路公保、保科正昭、鶴見祐輔、結城喜太郎、吉田茂、赤星鐵馬、伊澤多喜男、今井五介、伊藤文吉、佐藤晴雄、エム・ジェイ・エノックス、内ヶ崎作三郎、岡田忠彦、瀨木博信、森村市左衛門、小山松壽、山川端夫、築込田次郎、十河信二、膳桂之助、下條康磨、菊山精一、進藤誠一、

## 内外の弔電

# 一千六百

## 弔詞二十數通

國際人としての故岩永社長の訃報が一たび傳へらるゝや列國の關係者にも大なる衝動を與へ、殊に同盟通信社たる英國ロイテル、米國A.P.、獨逸D.N.B.、佛國ハバス、伊國ステファニ、蘇聯タスの各代表並に各地在駐の外國通信員及び各公共團體より丁重なる弔電を寄せられ、その數五十通に及んだが、更に新東亞建設中の大陸からは杉山元大將、王克敏、高宗武、汪兆銘、殷汝耕の諸氏を始め北支軍參謀長、同報道課長、朝鮮軍司令官、第二十師團報道課長、上海一田大佐等國內各地からの弔電一千六百餘通に及び、また告別式當日には別掲弔詞のほか學士會、日露協會、社團法人滿鐵社友會、日本運動記者協會、光永日本電報通信社長、社團法人ジャパソニョリストビュロー、日本俱樂部會長徳川公爵、日米協會、財團法人東京市政調査會々長阪谷男爵銀座西七丁目町會長、財團法人三省學舎代表等故人を偲ぶ懇篤なる弔詞が寄せられた。

杉村廣太郎、進藤信義、小泉又次郎、古賀肇一、頭本元貞、兒玉秀雄、増田次郎、香坂昌康、小平權一、小柳牧衛、高橋是賢、小泉信三、土方久徳、菱刈隆、日下巖廣田弘毅、廣幡忠良、出淵勝次郎、千石興太郎、關正雄、關屋貞三郎、三木武吉、三谷隆信、宮城長五郎、岩崎久彌、岩崎隆彌、池田成彬、石塚英藏、池田長康、三井高公、宮川米次、三島通陽、三輪壽壯、宮田光雄、三宅驥一、三木七郎、川村鐵太郎、森一兵、内ヶ崎作三郎、モリソン、森下博、本野久子、佐々木行忠、坂本俊賢、齋藤武夫、左近司政三、阪谷芳郎、西園寺八郎、西園寺公一、佐々木良一、清瀨一郎、喜安徳次郎、木村宗一、正力松太郎、植原悦二郎、米山梅吉、吉田善吉、副島道正、野村義太郎、野村徳七、阮振鐸、吉澤清次郎、芳澤謙吉、土屋耕二、津田信吾、村田省藏、村田祐治、武者小路實篤、黒田英雄、栗林徳一、洲島壽一、宇垣一成、内田信也、潮惠之輔、田誠、田所美治、田中穂積、鷹司信輔、高木喜寛、中島知久平、長岡半太郎、永井松三、金杉英五郎、鈴木富士彌、賀屋興宣、川村竹治、河田烈、龜井貫一郎、金光庸夫、片岡直道、安井英二、山下龜三郎、柳田諒三、矢野恒太、齋藤愷一、山崎達之輔、柳川平助、矢田部保吉、松永安左衛門、町田忠治、松阪廣政、前田米藏、丸山鶴吉、江口定條、下村宏島田俊雄、斯波貞吉、志立鐵次郎、島田勝之助、城戸元亮、清水順治、鹽野季彦、堀内良平、志賀直哉、松岡正男、城戸四郎、幣原喜重郎、淺野總一郎、秋山定輔、有馬頼寧、荒木貞夫、青木周三、安達謙藏、青木得三、松岡洋右、岩田均、東條英機、末弘嚴太郎、徳川昭順、根津嘉一郎、筑紫熊七、加藤恭平、若槻禮二郎、渡邊千冬、大橋八郎、大久保立、緒方竹虎、大和田悌二、岡崎鴻吉、大谷光明、大川義雄、大隈信常、大久保利武、織田信恒、萩野元太郎、オイゲン、

(以下省略)

弔辭

友人總代 佐藤 尙武

裕吉君。今私は君の親友の一人として君の靈前に立つて悲しい告別の辭を呈せんとして居る、本来ならば君の地位に對して相應はしい弔詞を草して靈前に供へる處であるが、私には夫れが出来ない。形式に捉はれるには吾々の間柄は餘りに隔てが過ぎ過ぎた。此嚴肅盛大な葬儀に臨んでも角張つた弔詞を讀む氣にはなれないのである。矢張り何時もの通りに打解けた形で君に永別の辭を捧げるのを許して貰ひ度い。

君は再びロンドンで會合、帝國の立場擁護のために密接な協力を開始したのである。ロンドン會議當時に於ける君の立場は吾々とは全然其趣を異にして、會議の圏外にあつて全く自由な立場に立つて居た、そして外から日本代表部を援助して呉れたのである。

君は當時、日本に於ける最大通信社の社長であり歴きとした社會上の地位を持つて居た關係上、ロイテル、ハマス、アソシエーテッドプレス等の世界的大通信社や大新聞の代表者と對等の交際が出来、彼等の間に伍して情報もとり且つ我主張を理解させ、日本の立場につき正確な報道を與へ、遍歴な判断をさせないよう努力したのである。君が自ら買つて出た仕事に非常な困難なものであつたにも拘らずの才氣と熱誠をこめた努力の結果、相當の効果を擧げ得たのであつて、我代表部としては君の隠れたる援助によつて非常な便宜を得たものである。英米兩國においても會談外の勢力を動員し、之によつて言論界や社交界に於て自國に有利な雰圍氣を作るに懸命の努力を拂つたのであるが、彼等は其目的のため働かせ得る適當の人物を多數擁して居たに反し、日本は僅かに一岩永を有するのみであつた。君は眞に我代表部にとつては國寶と云つてよかつたのである。而して當時の日本代表部の事務總長であつた一佐藤のみが君の貴い努力を多として居たばかりでなく、全權諸公も亦皆君の功績を認めたのであつた。

君は實に此問題に對する仲裁役を買つて出たのである。當時巴里で會つた私は君の決意を聞いて大に悦び、衷心其成功を祈つたのである。蓋し仲裁役を依頼されたことそれ自身既に新聞聯合として其實力を認識された譯であり、又之に成功する事によつて自然新聞聯合の國際的地位が揚がる許りでなく、其國際的信用も大に加はる譯であつたからである。果せる哉、君は立派に成功したのであつて、ロイテルからもアソシエーテッドプレスからも大に感謝されたのである。此一事も君の高潔な人格と豊富な智識経験の齎らした賜物であつて、吾々の敬服指かざる所である。此事は餘り世間に知られて居らず又知つて居る人でもそれ程問題の重要性を解して居ない傾があるから殊更に茲に一言して置きたいと思つたのである。

君の性格は私にとつては眞に羨ましいものであつた。何日も快活で物事に屈託せず、何事にも良く氣が付くがそれでいて神經質でない、君は又諸般の國際問題についても造詣頗る深く、且つ何時も對策の持主であつた。不肖の如きも君によつて啓發された事の幾何なるかを知らない。君は又直情直行の人であつた、自分の意見が眞直であると信じた場合、君の言論は中々強いものがあつた。そして自説を固執するにしても君には君一流の諧謔があるので相手方を怒らせることが殆どなかつた、君は實に徳な人であると云はざるを得ない。

君は又祖國愛に燃えて居る純日本人だつた。凡てを祖國の立場から考へ祖國を中心として割出すのである。偏狭な愛國心は眞に國を愛する所以でない、君は廣く世界を見世界に知識を求め、廣く讀み廣く交つてそして國策を編み出すのであつた。

吾々は明治廿八年芝山内の正則中學に入學して以來同級生として相識つたのである、君の正則時代は腕白の盛りで随分他人をいぢめたものであつたが、其惡戯も無邪氣から出たもので少しも惡意は認められなかつた。明治卅三年中學の校門を出てから君は一高に行き私は學校が異つた上に次で外國に出て仕舞つたのでお互の交通も途絶えたのであつたが、大正三年私がハルビン總領事に轉じた時、恰も君は長春驛長をして居たので茲に舊交を温める事が出来た。當時吾々に與へられて居た職責は、比較的限られたものであつたにも拘らず、君は志を大にして帝國將來の發展、滿洲經營等につき常に卓越した見識を持つて居た。當時歐洲大戦中で、君が政府の命を受けて黒龍鐵道視察に赴き其に辛酸を嘗めたのも其頃の事である。滿洲で別れて以來の十數年間は、君は内地にあつて鐵道院に務め私は歐洲各地に轉任して相會ふ機會がなかつたが、昭和五年倫敦軍縮會議開催せらるゝに及んで果然吾々兩

君は當時、日本に於ける最大通信社の社長であり歴きとした社會上の地位を持つて居た關係上、ロイテル、ハマス、アソシエーテッドプレス等の世界的大通信社や大新聞の代表者と對等の交際が出来、彼等の間に伍して情報もとり且つ我主張を理解させ、日本の立場につき正確な報道を與へ、遍歴な判断をさせないよう努力したのである。君が自ら買つて出た仕事に非常な困難なものであつたにも拘らずの才氣と熱誠をこめた努力の結果、相當の効果を擧げ得たのであつて、我代表部としては君の隠れたる援助によつて非常な便宜を得たものである。英米兩國においても會談外の勢力を動員し、之によつて言論界や社交界に於て自國に有利な雰圍氣を作るに懸命の努力を拂つたのであるが、彼等は其目的のため働かせ得る適當の人物を多數擁して居たに反し、日本は僅かに一岩永を有するのみであつた。君は眞に我代表部にとつては國寶と云つてよかつたのである。而して當時の日本代表部の事務總長であつた一佐藤のみが君の貴い努力を多として居たばかりでなく、全權諸公も亦皆君の功績を認めたのであつた。

君は實に此問題に對する仲裁役を買つて出たのである。當時巴里で會つた私は君の決意を聞いて大に悦び、衷心其成功を祈つたのである。蓋し仲裁役を依頼されたことそれ自身既に新聞聯合として其實力を認識された譯であり、又之に成功する事によつて自然新聞聯合の國際的地位が揚がる許りでなく、其國際的信用も大に加はる譯であつたからである。果せる哉、君は立派に成功したのであつて、ロイテルからもアソシエーテッドプレスからも大に感謝されたのである。此一事も君の高潔な人格と豊富な智識経験の齎らした賜物であつて、吾々の敬服指かざる所である。此事は餘り世間に知られて居らず又知つて居る人でもそれ程問題の重要性を解して居ない傾があるから殊更に茲に一言して置きたいと思つたのである。

君は又祖國愛に燃えて居る純日本人だつた。凡てを祖國の立場から考へ祖國を中心として割出すのである。偏狭な愛國心は眞に國を愛する所以でない、君は廣く世界を見世界に知識を求め、廣く讀み廣く交つてそして國策を編み出すのであつた。

# 北支總局

## 告別式

參列者三百餘名

故岩永社長急逝の報に接した北



支總局では直ちに總局長室に祭壇を設け岩永社長の寫眞を飾り、北京在住の官民諸氏の弔問を受け付けたが、社葬日たる七日には同時刻を期し告別式を執行、參列禮拜者三百餘名に及んだ。(寫眞は祭壇)

## 大連有志の

## 追悼會

(大連) 在大連滿鐵新舊社員並に新聞通信關係者有志發起にかゝる故同盟通信社長岩永裕吉氏の慰靈祭は東京における本葬と同時に七日午後二時市内光明台光明會館において厳かに執行された。

定刻滿鐵創業の苦を共にした舊友知己をはじめ高柳泰東社長其他操觚界代表等七十餘名參集、松山祭司の祝詞奏上に開式、發起人を代表して貝瀧謙吾氏悼辭を朗讀、

## 國通社の

## 追悼會

玉串奉奠の後參列者に對し挨拶あり午後三時終了した。

(新京) 二日朝「岩永同盟社長急逝さる」との至急電が東上中の升井編輯局長から森田社長に齎らされるや國通全社員は自分の慈父の訃報に接したかの如く痛惜哀悼した。七日同盟通信社長が青山齋場

で執行され故岩永社長と永別するの日、滿洲國通信社では社内大會議室に祭壇を設け青山齋場に於ける同盟社葬と同時に追悼會が厳かに執行された。森田社長始め三浦、中島兩理事、法城弘報協會庶務課長、弘報協會、國通全社員のほか和田滿洲新聞社長、並に來滿中の山本改造社長も參列され午後一時三十分開式、祭壇に飾られた御柩の間から拜される温



容溢るゝ如き故社長の寫眞に一同最敬禮の後午後一時四十分、黙禱を捧げ故岩永社長に永久の訣別をなしたのである。ついで森田社長から二十年に亙る長き交遊による功績の數々を述べ讃え參列者一同は更に哀悼の念を深くし午後二時過ぎ厳肅裡に追悼會を終つた。(昭和一一、八、七新京支社藤川佐吉)

## 同盟講習所開放

社外からも大量募集  
第二期卒業生は實地業務に就く

同盟講習所は八月十日を以て第二期を終了し、電信、速記、寫眞タイプライターの各科に互つて十五名の卒業生と廿五名の修業生を出した、卒業生は既に實地業務に携はり中には大陸へ派遣されたものも數名ある。優等生は各科を通じて六名、精勤者は十四名であつた豫料生の内成績優良のものは五名選抜されて正科へ編入されることゝなつた。

第三期生の募集に就いては本社従業青少年の外に今回は社外にも開放して優秀なる青年を入れることゝなつた。

第二期卒業生氏名

- △電信科 三宅 敬、小海長壽郎、宇山 廣三、國井年春、山本眞三
- △速記科 要 保太郎、加藤定行、齋藤 佐多、齋藤清
- △タイプライター科 神山謙介、石 井淨司、澤田 政雄
- △寫眞科 渡邊 清、山 崎義明、中村 憲二

尚ほ恒例によつて今回も優等生及び精勤者に藤岡賞(故藤岡正治君の遺志により同家より本社に寄託された奨學資金)を授與する事になつたが其の氏名左の通りである。



速記科 山田孝五郎 時計一個  
村瀨 太一  
雷樹水  
タイプ科 神山 謙介  
豫科 網井 三郎  
△精勤者 三宅 敬萬年筆一個  
電信科 小海長壽郎  
國井 年春  
宇山 廣三  
小海 惣治  
矢野 英仁  
山田孝五郎  
村瀨 太一  
雷樹水  
久夫  
雷樹水  
矢野 三郎  
矢野 三郎  
川面 茂雄  
仲丸 博道

南京支局は今般事務所を左記へ移轉した。  
南京支局は今般事務所を左記へ移轉した。

中南支總局移轉  
中南支總局は七月三十日左記へ移轉、電話番號も左の通り變更された。

上海北四川路八七九號  
(虹口ビル六階)  
社団法人 同盟通信社  
中南支總局

電話番號  
總局長室 四五五三五  
通信部 四七六・四七五  
聯絡部 四六六・四三〇元  
寫眞部 四〇元・四三二  
宿直室 四三三  
英文部 二六八・一九六  
經濟部 二九九三  
私書箱郵政局私信箱 第三三〇二號

但し英文部、經濟部は従前通り愛多亞路三四號大北ビルに於て執務してゐる。

## 同盟大作映畫は『新大陸』と決定

### 當選者發表

本社映畫部が内閣情報部監修の下に現地大ロケ撮影を了へ鋭意編輯中の更生支那を縦横に描く大作新映畫の題名募集は既報の通りであるが、右募集發表と同時に社内の人氣は果然沸き立ち締切後も尙殺倒するといふ盛況であつたが、之が應募題名二百六十件の中より嚴選の結果「新大陸」と正式に題名を決定、當選者左の如し

△當選者(同案二名)  
映畫部 田淵 秀明君  
連絡部 石川 道別君  
なほ同映畫は更生支那を政治、經濟、文化、産業及各方面のアンクルから描く雄編として大きな期待裡に完成を急いでゐる。

# 全國新聞社の輿望を擔ひ

## 古野新社長決定

### 理事會、滿場一致で可決

岩永前社長の後任を決定すべき理事會は別項の如く、九月九日開會、劈頭田中理事會長座席に就き社長岩永裕吉氏逝去につき哀悼の意を表したるのち、後任社長決



定の件を議題として上程、動議により座長指名詮衡委員を擧ぐるこゝとなり、田中座長より小森七郎(放送協會)、高石眞五郎(大阪毎日新聞)、森一兵(名

古屋新聞)、柴田勝衛(讀賣新聞)美土路昌一(東京朝日新聞)、阿部暢太郎(福岡日日新聞)、田中齊(國民新聞)、柏岡清勝(北海タイムス)、野中楠吉(高知新聞)田中都吉(中外商業新報)

を指名、詮衡委員は別室に於て協議の結果常務理事古野伊之助氏を推薦することに意見の一致を見たので、詮衡委員は再び會議に列し田中座長より委員會の經過を報告し、滿場一致を以て可決確定、次で古野新社長は二場の挨拶を述べ受諾の意を表し茲に第二代同盟社長は全國各新聞社に放送協會の總意的輿望を荷つて古野氏の就任を見る事となつた。

(寫眞は古野社長)

## 第十回 同盟理事會

### 重要議案全部議了

第十七回同盟理事會は九月九日正午より東京會館に於て開會、田中理事會長、野中柏岡兩副會長以下三十六名(出席三十名、委任六名)の理事出席、午餐を共にしたる後田中理事會長座席に着き開會を宣し、劈頭別項の通り社長に古野伊之助氏を滿場一致で決定、次いで常務理事堀義貴氏の任期満了に伴ふ改選の結果重任と決定、引續き左の議案を議決して午

後二時閉會した。  
一、故岩永前社長に對する感謝決議並に弔慰金贈呈の件(別項所載)  
一、理事大森實氏逝去並に後任理事の件(合同新聞社より後任として同社取締役編輯局長杉山榮氏を推薦せるにつきこれを承認故大森氏の靈に對し出席理事起立して哀悼の意を表す)  
一、報告

- (イ) 岩永社長急逝の件
- (ロ) 社員新聞社異動の件(東華日報、神戸又新日報、東京夕刊、近江新報の四社は廢刊に依り脱退、現在社員數は百七十七社)
- (ハ) 海外支局は開封支局、保定支局を新設、またパタヤ、九江、海口、蚌埠の各支局も事務開始準備中
- (ニ) 國內支局中佐賀支局は廢止
- (ホ) 同盟分館(電通ビル東側に新築中で、總延坪二二四坪(木造五階建)は役員室、總務局各室、會議室、食堂に使用し現社屋の狹隘を救ふ)

(一) 同盟講習所擴張(電送寫眞技士、速記者、無線電信技士の拂底に鑑み従來社員の中よりこれが養成をなしたつたが今回廣く一般からも希望者を募集して入所せしめること)

## 無電同報の準備成る

二十支社局に設備完了  
九月一日よりテスト開始

短波無線電信に依り同盟本社内から全國支社局に對しニュースの放送送信を行ふ計畫については豫て本社から逡信省に進出し、同省に於ても無線同報電信として鋭意これが開設準備を進めてゐたが、この程送信設備が完成したので第一期計畫として全國の同盟支社局中二十七箇所に受信設備を行ふこととなり、同盟技術部の設計製作に係る無線電信装置をこれ等全國主要地に一齊に施設すべく、本社技術部を總動員して七班の工事班を編成し、第一班は東北北海道、第二班は北陸及中部、第三班は中部及關西、第四班は中國及朝鮮、第五班は四國及九州の一部、第六班は九州、第七班は臺灣と夫々手分けして着工し八月末日を以て全部の裝置を完了した。右は同盟支社局内に無線送信室を設置し、高さ四十尺乃至六十尺のアンテナを張り最新式優秀なる無線受信機及豫備機を裝置し、東京本社内の無電室より放送される強力なる電波を直接キャッチして直ちに通信として出すのであるから有線聯絡の如き中繼の煩ひなく全國一齊に同報が出来るので、從來直通聯絡に恵まれなかつた地方は非常な便宜と速達が期せられるであらう。九月一日から當分の間テストを行ひ諸般の設備完了を俟つて正式開始の運びになる決定である、因みに第一期計畫受信地は左の通りで、引續き第二期計畫の工事に着手し本年内に合計六十數箇所の施設を完了の豫定である。

## 日滿間電送寫眞

同盟専用實施さる

日滿間寫眞電送は去る七月一日から滿洲電氣會社と逡信省との間で實驗電送の形式で新京大阪間に行れたが技術的事情により同月廿五日を以て一旦打切りとなつた。然るに滿蒙國境方面の情勢は依然重大で執地なる外蒙ソ聯軍の不法挑戦行為が益々大規模に繰返され

(上) 滿洲部新設(滿洲ニュースの特殊性を考慮して外信局内に滿洲部を新設し、職制を一部改正、九月一日より實施した)

されることとなつた。右は従來の如く電信局を経由する事なく同盟支局と同盟本社間で直接送受するものであるから運用上非常に便利となり、滿蒙國境方面の戰況は勿論滿洲、北支方面重要ニュース寫眞もこの同盟専用電送機に依り電送される事となつた。

## 月 部長會議

本社月例部長會議は八月二十五日午後三時半より會議室に開會、各常務理事以下各部長、塚本大阪支社長並に井井國通編輯局長出席左の報告を聴取し同五時半散會した。

- 一、福田政治部長 防共樞軸強化問題を中心に獨ソ不侵略條約締結による政界最近の動向。
- 一、伊藤參事 軍事及び政治評論家としての立場より北滿及び北支の視察談。
- 一、井井國通編輯局長 極めて最近ノムハンの最前線を視察した戰線の實狀報告。
- 一、塚本大阪支社長 去る十五日より大阪支社に於て新に東亞經濟通信の發行を開始せる經過並に業績。

## ◇お断り

本號は定日に編輯一切を終り方に印刷に取かかるとしたとき岩永社長の計に接し遂に全部の組替へをなし「社葬」記事を入れたので發行が大變遅れたことをお詫び致します。尚、山田實君の滿蒙國境戰の苦難記並に秋山慶幸君の「新聞とスポーツ」の兩記事及び其他の重要記事は次號週しとなつたことを御諒解願ひます。(係)

同盟人事

(その一)

總務局庶務部長 大川幸之助  
 經濟局參事 秋山操  
 北支總局(出張)局長 渡多尙  
 事業局調查部長 波多尙  
 中南支總局(出張)局長 結東武二郎  
 總務局人事部長 結東武二郎  
 大川庶務部長不在中庶務部長代理 兼務を命す(七・一各通)  
 香港支局長事務取扱 中村 農夫  
 香港支局長 片岡 誠一  
 京東支局長 片岡 誠一  
 神戸支局長 片岡 誠一  
 内信局政治部勤務ヲ命ス  
 聯絡局聯絡部社員 河瀬 守二  
 北支總局勤務ヲ命ス  
 内信局運動部社員 工藤 孝一  
 大阪支社勤務ヲ命ス(七・二五各通)  
 准社員ヲ命ス  
 關門支社勤務ヲ命ス(七・三一)  
 小林 博  
 開封支社勤務ヲ命ス(八・一)  
 廈門出張中(内)  
 信局政治部社員 竹野 進一  
 本社(歸還)ヲ命ス(七・一八)  
 廣東支局臨時在勤 松尾 信  
 (聯絡局規畫部社員)  
 本社(歸還)ヲ命ス(七・二三)  
 滿洲國通信社(出張)中  
 聯絡局規畫部社員試用 宇都宮 要  
 本社(歸還)ヲ命ス(七・一五)  
 廣東支局臨時在勤 高田 信一  
 (大阪支社社員)  
 大阪支社(歸還)ヲ命ス(七・二五)  
 日下部吉郎  
 社員試用、總務局經理部勤務ヲ命ス(七・一九)  
 原子林二郎  
 社員試用、内信局整理部勤務ヲ命ス(七・二八)  
 津田 正夫  
 社員試用、外信局勤務ヲ命ス(七・二七)  
 岩本 武士  
 社員試用、事業局寫眞部勤務ヲ命ス(七・一八)

坂西 保三  
 社員試用、事業局寫眞部勤務ヲ命ス(八・一)  
 島越 弘  
 社員試用、北支總局勤務ヲ命ス  
 野津 榮  
 社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス  
 西辻 太一  
 社員試用、神戸支局勤務ヲ命ス  
 植木 とし  
 准社員試用、總務局經理部勤務ヲ命ス(七・二八)  
 直井 靜江  
 准社員試用、内信局タイブ部勤務ヲ命ス(七・一七)  
 島田喜代子  
 准社員試用、内信局タイブ部勤務ヲ命ス(七・二九)  
 香中大二郎  
 准社員試用、經濟局外經部勤務ヲ命ス(七・二七)  
 濱田 浦吉  
 准社員試用、事業局寫眞部勤務ヲ命ス(八・一)  
 河田ツルミ  
 准社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス  
 貞光八千代  
 准社員試用、橫濱支局勤務ヲ命ス  
 長谷川群一  
 准社員試用、神戸支局勤務ヲ命ス  
 千原 芳夫  
 准社員試用、岡山支局勤務ヲ命ス  
 事業局寫眞部社員試用  
 小澤 徹郎  
 函館支局社員試用  
 布利幡兼雄  
 長崎支局社員試用  
 溝口 友信  
 社員(整理)部勤務(滿)岩城 政治  
 内信局通信社(出張)中  
 滿洲國通信社(出張)中  
 事業局調查部社員  
 中村 武嘉  
 名古屋支社社員試用  
 土屋 正明  
 中瀬長一郎  
 大阪支社社員  
 泉 敷次  
 大阪支社社員  
 大弓 正一  
 平松 茂  
 同 准社員  
 山本 千代  
 同 准社員  
 杉田 靜江  
 岡山支局准社員試用  
 服部 博

内信局發送部社員 夏目 八郎  
 關門支社准社員試用 上田 博  
 大阪支社社員 板倉 弘  
 仙臺支局社員 關 英次  
 大阪支社准社員 伯井 芳  
 支販支社准社員 高橋カヲル  
 關門支社社員試用 今田 一郎  
 依願解職(各通)  
 (その二)  
 外信局東亞部社員 安藤 利男  
 バタビヤ支局長ヲ命ス(八・八)  
 内信局政治部社員 内海朝次郎  
 北支及中南支(出張)ヲ命ス(八・二〇)  
 内信局整理部社員 福澤 延一  
 外信局東亞部勤務ヲ命ス(七・一)  
 聯絡局聯絡部社員 山田清一郎  
 聯絡局聯絡部社員 中野 凡夫  
 經濟局外經部勤務ヲ命ス(八・一四各通)  
 外信局英文部社員 渡邊 正二  
 經濟局商況部社員 清水 英雄  
 北支總局勤務ヲ命ス(八・三各通)  
 大阪支社准社員 水野 勝  
 北支總局勤務ヲ命ス(八・七)  
 經濟局外經部社員 渡邊 孟次  
 中南支總局勤務ヲ命ス(八・三)  
 内信局タイブ部准社員 林 忠勇  
 中南支總局勤務ヲ命ス(八・一二)  
 外信局發信部社員 中村喜三郎  
 中南支總局勤務ヲ命ス(八・一四)  
 總務局經理部社員 平山 登  
 南京支局勤務ヲ命ス(八・三)  
 聯絡局聯絡部 烏津 治郎  
 准社員試用  
 青森支局勤務ヲ命ス  
 青森支局社員 加藤三四治  
 仙臺支局勤務ヲ命ス  
 聯絡局聯絡部 永田 紘  
 准社員試用  
 京都支局勤務ヲ命ス(八・七各通)  
 社員ヲ命ス  
 石井 淳吉  
 事業局寫眞部勤務ヲ命ス  
 社員ヲ命ス  
 富田 文夫  
 大阪支社勤務ヲ命ス  
 葛原 麻陸

社員ヲ命ス  
 臺北支局勤務ヲ命ス(八・一各通)  
 岩崎 正雄  
 社員試用、内信局政治部勤務ヲ命ス(八・七)  
 下平 孝吉  
 社員試用、内信局政治部勤務ヲ命ス(八・一一)  
 上木鐵之進  
 社員試用、外信局發信部勤務ヲ命ス(八・七)  
 檜原 實  
 濱田 健一  
 社員試用、外信局發信部勤務ヲ命ス  
 篠崎 春三  
 社員試用、經濟局商況部勤務ヲ命ス(八・九各通)  
 北澤 正也  
 社員試用、經濟局外經部勤務ヲ命ス(八・八)  
 寺澤 博  
 社員試用、經濟局外經部勤務ヲ命ス(八・一五)  
 坂卷 三郎  
 社員試用、聯絡局聯絡部勤務ヲ命ス(八・一一)  
 篠原 國雄  
 篠原 公直  
 松田 喬  
 社員試用、聯絡局聯絡部勤務ヲ命ス(八・七各通)  
 佐藤 啓之  
 社員試用、聯絡局聯絡部勤務ヲ命ス(八・一〇)  
 一條 重一  
 社員試用、事業局調查部勤務ヲ命ス(八・一四)  
 鈴木 四郎  
 鈴木 徹男  
 社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス(八・一各通)  
 青野 義雄  
 社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス  
 松下 信男  
 社員試用、京都支局勤務ヲ命ス  
 永田 紘  
 鳥津 治郎  
 准社員試用、聯絡局聯絡部勤務ヲ命ス(八・三各通)  
 山添正次郎  
 准社員試用、聯絡局聯絡部勤務ヲ命ス(八・八)

保田 良夫  
 准社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス  
 石川 あき  
 准社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス  
 岡福 藤春  
 准社員試用、關門支社勤務ヲ命ス  
 佐久間克己  
 事業局調查部社員試用  
 西谷彌兵衛  
 同  
 杉森 新次  
 同  
 豊田 健吉  
 同  
 阿部 光郎  
 同  
 大津慶吾君(札幌支局) いづれも應召  
 北支總局社員試用 橋 敏夫  
 大阪支社社員試用 大竹 貞雄  
 紐育支局准社員 大川 貞雄  
 社員ヲ命ス(八・一各通)  
 札幌支局社員 猪俣 直  
 職員規程第十九條第二項ニ依り休職ヲ命ス(八・三)

互助會報告 (八月)

△出生  
 坂口 榮 (本社出版部)  
 △結婚  
 北方 時男 (本社寫眞部)  
 △退社  
 八郎 (本社發送部)  
 △應召  
 原子林二郎 (本社整理部)  
 芥川 典 (本社地方部)  
 布浦 芳郎 (本社經濟部)  
 清水 一 (本社聯絡部)  
 梶谷八洲雄 (本社外經部)  
 △病氣見舞  
 大川幸之助 (本社庶務部)  
 西村 二郎 (本社政治部)  
 仲 功 (本社出版部)  
 △水害見舞  
 長谷川群一 (神戸支局)  
 △弔 慰  
 清水英雄 (本社商況部) 實母死去  
 高橋幾代 (本社英文部) 實姉死去  
 辻 正二 (本社發信部) 實兄死去  
 廻島哲郎 (本社映畫部) 實弟死去  
 △消息 (八月)  
 △溝口友信君(長崎支局) 應召。  
 △大川幸之助君(庶務部長) 八月十日東京發、北支總局へ出張。

△金井元君(大阪支社) 應召  
 のところ八月十六日除隊となり同十八日より出社。  
 △秦 巖夫君(政治部) 廈門、汕頭方面作戦に特派從軍中であつたが八月二十日歸社。  
 △坂野小一郎君(映畫部)、瀧邊茂男君(寫眞部)、岡崎龜市君(社會部)小西、魯南作戦に從軍中とのころ八月二十日歸社。  
 △芥川典君(地方部)、高野光輝君(神戸支局)、布浦芳郎君(經濟部) 大津慶吾君(札幌支局) いづれも應召。  
 △菊地憲紀君(規畫部) 南支作戦從軍のため八月十七日福岡發臺北經由廣東支局へ向つた。  
 △井關實君(地方部) 中南支總局在勤中負傷し療養のため八月十八日歸社。  
 △上村藤吉君(會計主任) 會計検査のため滿洲、北支、中支各支社局へ出張中とのころ八月十九日歸社へ出張中とのころ八月十九日歸社。  
 △秋山如水君(大阪支社運動部) 八月廿五、六兩日大連で開かれる日滿歡迎競技會。九月一、二、三の三日間新京で舉行される日滿華三國交際競技。九月五、六兩日奉天で行はれる日滿交際競技カバリーのため八月二十一日神戸發大連へ向つた。  
 △齋藤直吉君(經理部次長) 八月廿一日東京發九州、臺灣、廣東各支局へ出張。  
 △内海朝次郎君(政治部) 八月廿二日羽田發望路滿洲に向つた。北支、中南支を視察する。  
 △渡邊孟次君(外經部) 八月廿五日神戸發香取丸で中南支總局へ赴任。  
 △升井芳平君(國通編輯局長) 聯絡事務打合せのため八月廿四日上海、同盟社を訪問し上海の挨拶をなした。滯京約二週間。  
 △塚本義隆君(大阪支社長) 事務打合せのため八月廿五日朝上海、翌日歸任。

寄稿歡迎

# 同盟通信報附録

## 同盟を護れ

### 古野社長の激勵

古野社長は去る九日の支社局長、各部長の聯合會議席上社長就任の第一聲を發したが、次で十五日午後五時全社員を本社三階に集め左の如く就任の挨拶を兼ねて全社員を激勵した。

即ち開口一番「この機會に第一に先づ故岩永社長の英靈に默禱を捧げたい」と冒頭し、倉田經濟部長の指揮の下に全員一分間の默禱を捧げた。(以下速記)

吾等の岩永社長の急逝は眞に時天の霹靂でありました。丁度社長が亡くなりました。二、三日東京に來られた時は非常に元氣で世界の情勢を物語つたり、社の將來を愉快に語つて歸られたのでありますが、突如として輕井澤に急逝されたの訃報に接した時は全く夢かとはかり驚いたのであります。諸君も嘸かし驚かれたことであらうと思ひます。今更ながら人生の果敢なきを痛感するのであります。

願れば岩永社長の生涯は全く通信報國の爲に捧げられた尊い一生でありました。社長がこの通信の事業に初めて關係せられたのは大正八年と記憶します。爾來二十有余年の間始終日本に於ける國家代表通信社の建設に盡瘁せられたのであります。

その當初に於ては、世界の新聞通信界に於ける我國の地位は遺憾ながら單なる外國の一屬領に過ぎない状態にあつたのであります。

日本人に口はあつても直接日本を世界に語る方法はなく、耳はあつても直接世界の情勢を聽く術はなかつたといふ弱小國に類する立場にあつたのであります。

斯かる國際情勢について多年熱心な研鑽を重ねておられた岩永社長は、この事態を非常に憤慨されて、どうしても日本人自ら日本を世界に、又世界を日本に傳へる通信機關の確立こそ自分の畢生の事業であるといふことを固く決意され、朝野識者の間に聲を擡らしてその必要を力説し、自分自らも名を追ふに非ず、利を求むるに非ず全く身も心もこの事業の爲めに捧げられた。社名を變へること國際、聯合、同盟と三度、地位を變へること取締役、専務取締役、専務理事、社長と四度、昭和十一年に至りて、同盟通信社の成立を見るや、我國將來のためにこの機關を最も完全な組織として、永久に存続せしめなければならぬとの固い決意から、世界各國の新聞通信界の現情と我國新聞界の情勢を充分検討せられた擧句、今日の社團法人同盟通信社を創立されたのであります。

そも、國內の輿論の基礎となり、國際關係の根柢となるものはその日に發生する事件の報道——即ちニュースであります。個人の行動も國家の動向も常にニュースを基礎として起り、動き、且つ定まるのであります。

従つて國の内外に蒐集頒布せらるる内外ニュースの正確公正を確保することは實に國家の重大なる責務である。

岩永社長は夙にこの點の重要性を痛感せられ、世界各國の新聞通信事業の實際を具さに調査研究された結果日本に於てはどうしても國家公共の目的のために内外ニュースの蒐集頒布を行ふ組織の通信社を設立しなくてはならない、といふ所から同盟の組織を社團法人と

決められたのであります。

次に、抽象的には正確公正なニュースの蒐集頒布といふが、之を取扱ふものは結局人間である。

永い年月の間には如何なる人間が出て來て如何なる變化を齎らさないと限らない。

それをどうして防ぐか、組織の力によつて、正確公正なニュースが國の内外に頒布せられるやうな方法をどうしたらよいか、この點に就いても慎重熟慮研究の結果、新聞社の共同機關とすることがニュースの正確性を確保する最善の方法であると云ふ結論に到達した譯であります。

即ち國家永遠の利益を顧みない一時的權力、財力、其他の諸勢力から超越して、何處までも事實の眞相を正確に報道し得るための組織として選ばれたのが今日の同盟であります。

斯の如くにして岩永社長が邦家のために遺された同盟通信社は恐らく世界に冠絶せる組織を持ち目的を有してゐると斷言して決して憚らないのであります。

斯く申す私も岩永社長の驥尾に附して聊かその組織の完全を期する爲め苦心した後輩の一人でありまして、世界各國何れの國に現存する通信社に比して斷じて勝るとも劣らない組織が完成されたことを心秘かに誇りとして居る次第であります。

更にその機構と陣容を比較して見ましても今日の同盟は世界第一流の通信社であると斷言して少しも憚らないのであります。

眞に岩永社長の生涯は理論の實踐、理想の實現のために終始奮闘努力せられ、正しく、強く明るく生きられた尊い一生であつたといふことを繰返し追想せざるを得ないのであります。

而して吾等二千の同盟建設の同志は故岩永社長からこの偉業を引續いで今更ながら吾等の双肩に課せられた責任の愈々重大なるを痛感する次第であります。

岩永社長急逝に伴ひその後任を選定するに當つても、我が同盟の理事會は故社長の遺志を繼いで、その理想を實現し、その使命を達成するところに重點を置かれたものと考へられるのであります。

従つて私個人としては元來社長など云ふ役割には甚だ不向であることを自覺し、且つもつと自由な立場で働きたい希望を持つてゐるにも拘らず敢へてこの重任をお引受けした所以は全く二千の同志諸君と力を協せて我等の同盟を益々強化することが當面の急務であると痛感した爲めでありました。

以上申述べましたやうな立派な同盟の組織とその機構とを一体何うして活用し、強化して行くか、これは總て人の力に俟たなければなりません。

幾ら立派な組織を持ち、使命を擔つてゐても、これを運用するにその人を得なかつたならば到底所期の目的を達成することは出来ないものであります。

かかる故に不肖私が今日岩永社長の後を繼いで、第一に感ずることは諸君の中から第二の岩永を見出し、第三の岩永を育て上げ、以て同盟の社礎を磐石の安きに置き、本來の使命達成に邁進しなければならぬといふことであります。どうか此處に集まられた諸君はその一人、が、同盟を護り、同盟と共に生き、同盟と共に闘ひ、同盟と共に斃れる覺悟を定めて頂きたいのであります。

諸君は常に諸君の胸裡に社團法人同盟通信社の名を銘記されたい。

名は體を現す、社團法人は公益機關たることを示し、同盟通信社は大同結盟の精神を表示してゐるのであります。小異を棄て、大同に即き、小我を去つて結盟に據る。

この精神を以てこの事業の建設に邁進されたい。時恰も歐洲に於ては第二の世界動亂を捲き起さうとしてゐる更に東亞建設の大業は將にこれからである。

従つて吾等の同盟に課せられた任務は愈々重大を加ふるのであります。

どうか諸君は益々元氣を養ひ、協力一致、萬難を排して我社本來の大使命達成に向つて勇往邁進されんことを衷心より切望して止みません。